

氏 名	金井 雅仁
学 位 の 種 類	博士（心理学）
学 位 記 番 号	博甲第 8637 号
学位授与年月	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	文化的自己観と身体が感情の認識と制御に及ぼす影響

主 査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川 進太郎
副 査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充
副 査	筑波大学講師	博士（学術）	望月 聡
副 査	筑波大学准教授	博士（心理学）	藤 桂

## 論文の内容の要旨

金井雅仁氏の博士学位論文では、ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提である文化的自己観と、身体内部の生理状態に関する感覚である内受容感覚が、感情経験の認識における明瞭性と感情制御方略の効果に及ぼす影響を検討するために、7つの実証研究が行われている。論文は大きく三部構成となっており、第Ⅰ部が理論的検討、第Ⅱ部が実証的検討、第Ⅲ部が総括である。

まず、第Ⅰ部の理論的検討は第1章～第4章からなっている。第1章で金井氏は、感情の認識に関する理論的背景を整理した上で、感情認識における内受容感覚の重要性を指摘している。第2章で金井氏は、感情の制御に関する理論的背景を整理した上で、感情制御における感情認識と内受容感覚の重要性を指摘し、身体的アプローチに期待される効果について述べている。続く第3章で金井氏は、文化的自己観の位置づけとして、相互独立的自己観（自己は他から切り離された存在である、という前提）と相互協調的自己観（自己は他と根源的に結びついた存在である、という前提）について説明した上で、本論文では同文化内におけるそれぞれの自己観の個人差（相互独立性、相互協調性）を扱うこと、両者には特性的な側面と状態的な側面があること、および、両者と感情認識および感情制御との関連について論じている。第4章で金井氏は、これらを踏まえて本論文の目的についてまとめている。

続く第Ⅱ部の理論的検討は、第5章と第6章からなっている。第5章で金井氏は、感情認識の明瞭性と相互独立性・相互協調性および内受容感覚の関連の検討として、3つの研究（研究1～研究3）を行っている。まず【研究1】では、日本人大学生を対象に質問紙調査が実施され、（1）日本人サンプルにおける相互独立性・相互協調性の個人差とアレキシサイミア傾向が（海外の）先行研究通りの関連を示すか、（2）相互独立性・相互協調性の個人差、アレキシサイミア傾向の個人差、感情認識の明瞭性を表す指標が関連するか、という2点が検討された。その結果、先行研究と同様に、日本人サンプルにおける相互独立性・相互協調性の個人差もアレキシサイミア傾向と関連

を示すことが確認された。また、相互独立性よりも相互協調性の方が、感情認識の明瞭性に繋がりやすいことが示唆された。次に【研究2】では、相互独立性・相互協調性、内受容感覚の敏感さ、感情認識の明瞭性の間の関係性を検討する実験室実験が実施された。その結果、男性において、私的自己意識と課題中の心拍数を統制した場合に、相互協調性の高さが、鈍感な内受容感覚を媒介して感情認識の明瞭性の低さと関連するという過程が示された。続く【研究3】では、相互独立性を高めて相互協調性を低めることが予想される個人主義プライミングと、相互独立性を低めて相互協調性を高めることが予想される集団主義プライミングを行い、プライミングの違いによって内受容感覚の敏感さや感情認識の明瞭性に違いが見られるかを検討する実験室実験が実施された。その結果、内受容感覚の敏感さと感情認識の明瞭性に対するプライミングの影響は見られなかった。

次に、第6章で金井氏は、認知的方略および身体的方略による感情制御と相互独立性・相互協調性の関連の検討として、4つの研究（研究4～研究7）を実施している。まず【研究4】では、日本大学生を対象に質問紙調査が実施され、（1）認知的方略（認知的再評価、抑制）の使用傾向と普段の感情経験の傾向との関連が、相互独立性・相互協調性の個人差によって調整されるか、（2）相互独立性・相互協調性と普段の感情経験の傾向との関連性に、認知的方略の使用傾向がどのように結びついているか、という2点が検討された。その結果、認知的再評価の使用傾向と不快感情の経験傾向との関係性が相互協調性によって調整されることが示された。ただし、その調整効果は、相互協調性が高い者において、認知的再評価を頻繁に行っているほど、不快感情の経験傾向が低い、という結果が示された。また、相互独立性・相互協調性と普段の感情経験の傾向との関連性には、認知的方略の使用傾向を介する過程と介さない過程の両方が含まれる可能性が示された。続く【研究5】では、調査会社のモニターを対象にウェブ調査を行い、研究4で得られた知見の追試を行った上で、身体的制御の使用傾向と普段の感情経験の傾向との関連が相互独立性・相互協調性によって調整されるかが検討された。その結果、研究4と同様に、相互協調性が高い群において認知的再評価の使用傾向と不快感情の経験傾向が負の関連を示すという結果が得られた。さらに、相互協調性が高い者において、身体的制御の使用傾向と不快感情の経験傾向に負の関連が示された。そして【研究6】では、不快感情喚起画像を視聴して生じた主観的な不快感情と生理反応の変化を、認知的再評価や腹式呼吸法によって実際に制御させ、その効果が相互独立性・相互協調性と関連するかを検討する実験室実験が行われた。その結果、相互協調性の高さが認知的再評価の効果を抑制し、腹式呼吸法の効果を促進することが示された。最後に【研究7】では、相互独立性・相互協調性の状態の変化を引き起こすプライミング手続きを行い、プライミングの違いによって認知的再評価と腹式呼吸法による感情制御効果に違いが見られるかを検討する実験室実験が行われた。その結果、2つの感情制御方略の効果に対するプライミングの影響は見られないことが示された。

第Ⅲ部（第7章）で金井氏は、第Ⅱ部の実証的検討で示した研究を総括し、得られた知見の整理を行っている。そこでは、7つの実証研究から得られた総合的な知見として、以下の3点が述べられている。（1）感情の認識においては、特性的な相互独立性の高さは感情の認識（もしくは、報告）を明瞭にし、特性的な相互協調性の高さは感情の認識を不明瞭にする。（2）身体内部の感覚である内受容感覚が相互協調性の高さと感情認識の明瞭性との関係をつないでいる。（3）特性的な相互協調性が、認知的再評価と身体的制御の効果を左右する個人差要因となっている（ただし、それら2つの感情制御方略の有効性はそうした個人差のみによって決定されるわけではない）。最後に金井氏は、本論文の限界と今後の課題について論じている。

## 審査の結果の要旨

### （批評）

本論文は、感情の認識と制御において、文化に根付いた自己観と身体内部の生理的な感覚が関わっているということを、質問紙調査と実験室実験を駆使して示した、極めて独創性の高いものである。このように、文化と身体が感情制御に結びついていることを示唆した本論文は、今後の感情制御研究の発展に大きく寄与するとともに、グローバル化に伴う多文化社会の中で、より効果的な援助や介入を行うための臨床的示唆も有している点で、非常に高く評価できる。

平成30年1月16日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。